

研究ノート

フェミニズムと心理学

森 永 康 子

フェミニズムとは、性別による差別を認識し、女性と男性の平等をめざそうとする思想、運動、理論のことと定義されるであろう。1960～70年代の第二波フェミニズムは、構造主義やポストモダニズムなどと同様に、既成の価値観や学問の枠組みそのものの問い直しに大きな貢献を果たしてきた。価値中立的とみなされがちな学問や研究が、それが行われている社会の中に存在する価値や権力から逃れえるものではないということをフェミニズムは指摘する。心理学も、フェミニズムにより「心理学」という学問の枠組みをゆさぶられ、アメリカでは「フェミニスト心理学 (feminist psychology)」とよばれる流れが生まれてきた。

心理学には、人間の行動は個人の中にあるものから生じるとみなすいわば本質主義的傾向がある。身体的性別もその一つで、これまで女性と男性の行動や態度、能力などにおける違いは主に身体的性別に帰属されてきた。これに対し、性差はジェンダーによるものつまり社会によって作られたものであるというフェミニズムの主張により、心理学においてもジェンダーの視点から従来の理論や研究方法などの見直しがすすめられたのである。

本稿では、主として研究方法に焦点をあてフェミニズムが心理学に及ぼした影響について紹介する。なお、本稿における科学史や科学哲学についての論述部分では、その多くを二次資料に頼っていることを断っておきたい。これは、本稿が心理学史や心理学の哲学を論じるものではなく、フェミニズムによって

批判されてきた心理学の側面を紹介するためのものであることによる。

1 科学は実証を重視する

科学としての心理学の原点は、19世紀後半ドイツのライプツィヒ大学で実験室を開設したヴント、あるいは、『精神物理学要綱』を発刊したフェヒナーであるといわれている（佐藤達哉，2002）。心理学史については他書（佐藤，2002など）に譲り、ここでは心理学の源流である西洋の実験哲学と機械論的哲学をみてみよう（参考：ブライアン・イーズリー，1986；エヴリン・ケラー，1996；キャロリン・マーチャント，1985；リンダ・シェパード，1997）。

機械論的哲学が登場した17世紀には、自然は育みと実りをもたらすものであったが、同時に、疫病や飢饉、嵐をももたらすものとみなされていた。こうした無秩序な自然はコントロールされる必要があると考えられ、科学はそのための方法を生み出すものであった。観察や実験を通して自然を理解し、人間のために自然を利用すべく科学技術が進展していった。そして、フランシス・ベーコン（1561–1626）の『機械論的ユートピア』の書物などを経て、観察や実験によって実証することがこの時代に承認されるようになったのである。こうして、17世紀に、科学は科学的方法すなわち帰納と演繹というある特別な手続きを経て得られる知識を意味するようになった。

現代でも、科学は、機械論的・数学的モデルに還元できる度合いが大きければ大きいほど、より正統なものともみなされる。そのモデルはもっともハードな科学といわれる物理学であると考えられている。ロンダ・シービンガー（2001）によると、物理学のハードさは、厳密に再現可能な事実に基づいた認識論的ハードさ、生命なきものを対象とする存在論的ハードさ、教えることや学ぶことのハードさによって特徴づけられているという。そこでは、ナノレベルでの測定がなされ、同じ手続きをとることにより同一の現象を再現することが可能である。

ところで、科学の研究対象である自然は女性と同義でもあった。実りと災い

の両方をもたらす自然と同様、女性は子どもを育む慈母であり、また性悪な娼婦でもある。こうした自然を女性とみなす考えは、「母なる大地」「神秘のベールをはぐ」「自然と文化の結合（結婚）」などのメタファーに表現されているように現代でも通用している。科学が発展した17世紀、学問は公には女性に閉ざされ、研究者のほとんどは男性によって占められていた。したがって、当時の科学研究の状況は、まさに、男性科学者が女性である自然の秘密を解き明かしていくというものであった。男性は、自然である女性を理解しコントロールする役割を担っていたのである。

2 心理学の科学性

科学主義が高揚した1970年代には、人文科学においてもその目標はより高い確実性と制度上の関心を得るために、人間の営為を可能な限り数量化することであった（シービンガー，2001）。心理学の領域でも心理学の科学性を高めるために、ハードサイエンスを見本として、客観性、結果の再現性が重視されるようになり、人間行動の数学的記述や統計的手法への依存が高まったのであろう。シェパード（1997）は「心理学者は、科学としての心理学の価値を証明しようと、客観的で定量化できる行動に研究をしぼっている」と述べている。

これをよく表すものとして、人間のある反応（ y ）をある刺激もしくは反応（ x ）の関数としてみなす $y=f(x)$ という公式や、心理学の研究で多用される分散分析、因子分析、重回帰分析などの統計的手法の基本である一次関数式 $y=a\Sigma x+b$ があげられよう。心理学では、人間のさまざまな反応を公式や数式にあてはめようとする努力が連綿となされている。特に、人間の反応を一次関数で表そうとする努力は、統計的手法やそれに伴うコンピュータ・プログラムの開発や進歩とともに流行が変わり、同時に緻密化してきた様相がある。その背景には、より緻密な数式を使うことでその研究の客観性が高まり、さらに研究の価値も高まるという錯覚があるのではないかと思われる。そして、そうした複雑な統計的知識を学ぶのに要する時間と努力が、研究者個人や学問として

の心理学の価値を高めているという錯覚も生じているようだ。しかし、研究者個々人の使える統計的手法によって、人間の記述の仕方が変わってくるという状況をも生んでおり、それは皮肉にも心理学者のめざしている客観性とは異なる方向にむいているのではないかと思われる。

その他、科学としての心理学の価値を高める努力、すなわち、客観性のルールは研究者の中立性や結果の再現性というところにもみられている。物理現象と異なり、人間の反応を再現することは難しい。しかし、その中でも研究者の中立性や結果の再現性が保証されるべく努力されてきた。たとえば、実験者期待効果を抑えるために研究仮説を知らない実験者や実験協力者を用いること、繰り返される実験をなるべく一定の条件にするために実験者が白衣を着用することなどである。研究者の存在を消すことによって中立性を保とうとする努力もなされている。これはまた、論文執筆の際に「参加者（被験者）は〇〇の条件に割り当てられた」というような受容表現を用いることにも表れている。しかしながら、どのように研究者の中立性を保とうとしても、研究のテーマの選択やデータの収集方法など、研究のあらゆるプロセスに研究者の価値観が反映されるのである。

3 心理学の研究方法

心理学では実証すること、客観的であることが重視され、それが心理学の主流を占めてきた。日本の心理学関係の雑誌に掲載されている論文の多くはこうした実証主義的なものである。以下、実証的な心理学の研究方法について論じたい。

1) 研究テーマ

心理学では研究者の身近にある問題を研究テーマとしてとりあげることが多い。たとえば、インターネットメールや携帯メールの盛んな現代では、そうしたメールが社会的ネットワークとどのように関連しているのかの研究が行われ

ている（たとえば、川浦康至・山下清美・川上善郎，1999；金官圭，1999）。つまり、その時代や文化に特有な現象が新しい研究テーマとして拾い上げられていくのである。さらに、その時代・文化を背景にした研究者自身のもっている価値観が反映される。たとえば、ホスピタリズムや母子関係の研究は、子どもにとっての母親の重要性を説くことで、母性神話に貢献してきた（青野篤子，1994；大日向雅美，1988など）。これらの研究には「子どもにとって母親は欠かせない存在」「母親は子どもに愛情を注がねばならない」という研究者の価値観が含まれていたことが推測できる。そして、この価値観は研究者個人だけのものではなく、その研究者が生きている時代や社会を支配し主流となっている一群の人々の考えを反映する。

働く女性についてのアメリカでの研究をとりあげてみよう。古くは心理学においても、「女性の役割は家庭にある」ため、女性の職業選択や就労行動についての研究はほとんどなされていなかった。1970年代以降の働く女性の増加とともに、女性のキャリアについての研究が盛んに行われるようになったのである（Gary Powell, 1988）。しかし、ここでいう働く「女性」とは「ヨーロッパ系アメリカ人の中流階級の既婚女性」を意味している。より貧しい階級の女性は1970年代以前も働いていたのである。また、働く女性の研究が盛んになってきた後も、妻や母親という役割との関連や仕事と家庭との葛藤が研究テーマとしてとりあげられることが多かった（小泉智恵，1997を参照のこと）。一方、男性に対してはこのような役割葛藤の研究はほとんど行われていない。また、こうした働く女性についての研究の多くは、女性研究者によって行われている。つまり、女性が働くことで家庭や家族がどのような影響を受けるのか、働くことで精神的健康にどんな影響があるのかをデータを通して検証していくことで、「女性が働くとは家庭が崩壊する」というステレオタイプの考えに対して、働くことが女性の精神的健康にプラスの影響をもたらしているという反証を示してきたとも解釈できる。また、それは、女性が働くことの罪悪感を払拭するような結果を導くことでもあったのかもしれない。

研究が行われている社会背景や研究者の立場を考慮する必要性は、心理学の研究スタイルにもかかわってくると思われる。たとえば、心理学論文の多くはその研究テーマに関連する領域の研究の要約から始まり、それらの研究の問題点が論じられる。興味あるテーマを選択した後は、その領域の研究論文を集めることが必要となるのである。これは、個々の研究の位置づけを確認する作業として必要なものであるが、過去の研究に準拠する程度が高いほど、そのパラダイムから逃れることは難しく、そこに含まれた価値観や研究の視点を引き継ぐことになるのである。

2) データの収集と分析

数量化が主流の心理学では、データの分析に統計的手法を使うことが多い。この中で多用されるt検定、分散分析などの平均値の比較を行うパラメトリック検定を実施するためには、帰無仮説と対立仮説を設ける必要がある。たとえば、t検定の場合、任意の二つの標本があるとすると、それぞれの標本の母集団には差異がないという帰無仮説、差異があるという対立仮説が立てられる。しかし、研究仮説においては、最初から標本間に差異があることが予想されており、検定結果として帰無仮説が棄却されることが望まれるのである。つまり、研究とは、標本間もしくは条件間の差異を出すことが目的なのである。また、研究者があらかじめ予測した差異がみられなかったときには、差異が出るまでさまざまな分析を行うのが通例である。そして、何らかの条件間に「統計的な有意差」というものがみられた場合が、よい結果となる。「有意差」のないものは、具体的な研究方法あるいはとりあげた要因や要因間の関連についての仮説のどこかに問題があるとみなされ、論文とはならない。つまり、さまざまな条件間で違いのあるもののみが報告されていくのである。さらに、「統計的有意差」という言葉の意味がとり違えられていることも多い。統計的検定により二つの条件間に「有意差」があっても、それが現実にも意味のある違いであるとはいえない。同じことは「統計的に有意な相関関係」「統計的に有意な交互

作用」等にも共通する。

心理学では身体的な性別によって、何らかの心理学的変数に統計的な有意差があることを報告する研究が多い。ジェンダーという概念により、身体的性別による違いとして理解されてきたものが、社会的文化的に作られてきたものである可能性が大きいことが示唆されてきた。つまり、身体的性別は他の社会的な要因と交絡しているのである。たとえば、Jack Dovidioら（1988）の行った社会的地位の高さと視線行動との関連についての研究はこれをよく示している。彼らは、身体的性別にかかわらず、社会的な地位の高い者は自分が話している間地位の低い者を見るが、話を聞くときには相手をそれほど見ない。一方、地位の低い者は話を聞くときに地位の高い者を見るが、自分が話をしているときには相手をそれほど見ない。そして、男女が同等の地位にいるように設定した場合には、男性は地位の高い者と同じような視線行動をとり、女性は地位の低い者と同じような視線行動をとるということを報告している。つまり、非言語的コミュニケーションにおける男女の差異は、身体的な性別によるものではなく、社会的地位の高低や権力の強弱によって説明されるのである。性差研究のもう一つの問題点は、統計的に有意な性差がみられたときには、「性差があった」ということだけの報告で終わる場合が多いことであろう。性差をもたらしているものを生物学的な原因に求めることで、すべてが説明されたような錯覚をいただくのである（森永康子，2001）。

また、データを収集する際の質問項目には研究者のもっている社会背景や価値観が反映される。1970年代の性役割態度を測定する項目の中には「家族の長である男性のいらいらや不便を最小にするため、妻はあらゆる努力を行うべきである（AWS）」「母親が働いていると、就学前の子どもには害のおよぶことがある（ISRO）」に類するものが含まれていることが多かった。これは、第二波フェミニズムの影響を受けたその当時の社会背景を反映するものであろう。時代が変われば、「妻の収入が高くなるにつれて、夫婦のきずなは強くなる」「子どもは保育園で育ったほうが、対人関係のスキルが身につく」に類する項

目が作られていくと考えられる。

さらに、心理学実験では、研究者（実験者）と実験参加者（いわゆる被験者）の性別の問題を考慮せねばならない。アカデミックなところにいる研究者は男性が多いため、男性実験者－女性被験者という組み合わせもよく起こりえる。実験者は、自分では中立を保っていると思っているかもしれないが、現実社会と隔離された実験室では、他者を理解する社会的文脈が失われ、実験者と被験者の身体的性別が現実社会以上に目立つ可能性が高くなることが指摘されている（Florence Denmark, Nancy F. Russo, Irene H. Frieze, & Jeri A. Sechzer, 1988など）。したがって、そこで得られた実験結果は、中立な実験者と被験者という関係ではなく、「研究者」と「男性」という権威を二重にもった者と、権威をもたない者によって生み出された結果であるかもしれない。また、研究データに影響を与えまいとする試みの一つに、研究者が白衣を着ることがあると前述した。しかし、白衣を着ることは別の効果をもたらす可能性がある。身体的性別にかかわらず、ユニフォームは社会的地位を明確にし、権力の象徴となる場合もある。一見、ジェンダーや社会的文脈とは関係のなさそうな記憶や言語などの実験においても、暗黙のうちに、ジェンダー構造や権力構造がちこまれている可能性がある。

3) 結果の解釈と利用

統計的有意差の解釈やホスピタリズムの研究についてはすでに述べたが、心理学の研究が現代に流布しているステレオタイプや差別、偏見を維持し、強化することにつながる可能性があることも認識せねばならないのはいうまでもない。たとえば言語能力の性差を研究するという事は、その結果が言語開発や教育、さらに、教育の機会などの差別をもたらすことになるかもしれないのである。

冒頭でもふれたが、心理学は、人々の態度や行動、能力などの違いを、その個人の内面に帰属しやすいという本質主義的な面が強い。フェミニズムの影響

で1970年代には、ジェンダー・ステレオタイプや偏見の研究が進んだものの、人間の内部に関心をむけるという心理学の特性により、ステレオタイプや偏見の研究は、行動よりも個人の内面（認知過程など）に進んでしまった（Rhoda Unger, 1997）。そして、これは、自己主張訓練などにみられるように、ステレオタイプ、偏見、差別などに抗する力を個人に求める方向へとつながりやすい。個人の力を高めることは重要であるが、教育の機会や企業の差別的待遇などの社会の構造や仕組みを変えることも必要ではないだろうか。

4 フェミニスト心理学の方法

このような批判をもとに提唱されてきたフェミニスト心理学の研究方法は以下のような3つにまとめることができる（Stephanie Riger, 1992）。

① Feminist Empiricism フェミニストによる実証主義的研究。本稿ではここまで実証主義的な研究に対する批判を述べてきたが、フェミニスト心理学は心理学で行われてきた実証主義的な研究を否定するものではないことに注意してほしい。実証主義的研究は社会科学や人文科学の中ではきわめてユニークな方法であり（Mary Crawford & Jeanne Marecek, 1989など）、むしろ、性差が社会的に作られたものであることをデータをもって確認することもできるのである。たとえば、Carol Seaveyら（1975）のベビー Xの実験では、乳児の性別のラベルによって、周りの大人が扱い方や見方を変えることを確認した。Patricia Pliner and Shelly Chaiken（1990）は、女性が魅力的な男性の前では少食になることをみいだした。これらは、社会によって女らしさや男らしさが作られることや、さらに、同一個人でもその個人のおかれた文脈によって、女らしい行動や男らしい行動をとるようになる可能性を示唆するものである。

また、前述した、働く女性についての研究においても、家庭の外で収入のために働くことが女性の幸福感に寄与していることをデータをもって明らかにし、「女性の幸せは家庭にある」というステレオタイプを打ち破る説得力のある研究結果となっている。

② Feminist Standpoint Epistemologies フェミニストの視点からの認識論的研究。科学が男性によって支配されてきたように、心理学においても男性中心という伝統が続いてきた。近代心理学の成立以降もアカデミックな場には男性が多かったため、研究者も研究協力者（研究対象）も男性という研究がほとんどだったのである。しかし、こうした研究の結果は、男性＝人間代表と解釈され、女性にも当てはまるとされてきた。Feminist Standpoint Epistemologiesでは、こうした男性を中心にした理論や研究では女性を理解することはできないと考える。たとえば、道徳性の発達についてのキャロル・ギリガンの研究（1986）をあげることができよう。ローレンス・コールバーグ（1987）は、男性のみを研究対象とした結果から道徳性の発達段階についての理論を組み立てた。そして、その理論をもとに女性を対象に研究を行ったところ、同年代の男性よりも低い段階にいる女性が多いという結果が得られた。このことから、コールバーグは女性は道徳性の発達が男性よりも低い段階でとまると結論づけたのである。これに対し、ギリガンは、人工妊娠中絶をしようとする女性を対象に面接による研究を行った結果をもとに、コールバーグの理論が正義の道徳性であるのに対し、女性の道徳性は他者をケアするという側面で発達すると考えたのである。ギリガンの研究は、中絶という女性にしか起こりえない場面をとりあげた点などが批判の対象となっているが、しかし、男性中心の理論では、女性を理解しえないことを示したものといえる。その社会的地位ゆえにこれまで沈黙させられてきた女性の声を丹念に拾う必要性が示唆される。また、このFeminist Standpoint Epistemologiesでは、女性だけでなく、社会の支配階層あるいは主流となっている一部の人からはずれた人々を研究するときの考え方にも通じる。

③ Feminist Postmodernism フェミニストによるポストモダニズム。ポストモダンとは、心理学では「社会的構築主義（social constructionism）」と理解してもよいであろう（ヴィヴィアン・バー，1997）。社会的構築主義においては、それまで存在すると考えられていた「真実」や「事実」といったものが、その

時代や文化の価値や権力によって作られるものであると考える。そして、「真実」は多種多様であると主張する。Feminist Postmodernism では、主にテキストや会話の分析が行われ、そこに隠されたジェンダーを読み解くのである。

以上のようなフェミニスト心理学の研究方法のほかに、Mary Gergen (1988) は、研究にあたって以下のような認識をもつことが必要であると指摘している。

- ①実験者と参加者（被験者）がお互いに依存している（interdependent）ことを認識すること
- ②実験者と参加者（被験者）のもっている社会的・歴史的環境の文脈から切り離すことを避けること
- ③研究の文脈の中にある個人の価値観の性質を認識し、明らかにすること
- ④事実は言語コードと独立ではない、ということ認めること
- ⑤科学者の役割を神秘化しないこと、科学を作る人と消費する人の間に平等的な関係を築くこと

5 最後に

アメリカやヨーロッパにおける第二波フェミニズムは、社会的な運動であると同時に、アカデミックなところにも大きな影響をもたらした。日本においても60年代後半から70年代前半にはウーマンリブと呼ばれる運動が盛んとなり、80年代には「女性学 (women's studies)」が登場した。心理学においては、1985年にしまようこによる『フェミニスト・サイコロジー：女性学的心理学批判』（垣内出版）、1987年には村山久美子による『女性心理学入門』（誠信書房）が出版されている。90年代には、柏木恵子・高橋恵子編著『発達心理学とフェミニズム』（ミネルヴァ書房、1995）、青野篤子・森永康子・土肥伊都子著『ジェンダーの心理学』（ミネルヴァ書房、1999）、伊藤裕子編著『ジェンダーの発達心理学』（ミネルヴァ書房、2000）などのように題目に「フェミニズム」や

「ジェンダー」を使う心理学関係の著作も出版されるようになった。また、臨床心理学の分野ではフェミニスト・カウンセリング学会も作られ、関連する著作も多い。心理学関係のいろいろな学会においても「ジェンダー」をテーマに行った発表も多くなされ、2003年に開催される日本心理学会第67回大会では「ジェンダー・フェミニズム」という発表部門も新設された。

しかし、2000年における日本の大学教員に占める女性の割合は四年制大学で13.5%（文部科学省ホームページより）という状況を反映してか、フェミニストの視点をもった心理学者やジェンダー研究の心理学界への影響力はそれほど強くないのが現状である。もちろん、女性であればフェミニスト的な視点をもっているということもなく、男性はフェミニストにはなりえないということもない。今後、フェミニストの視点をもった心理学研究をどのように進め広めていくかが日本におけるフェミニスト心理学の課題といえるだろう。

本稿で論じた点は、女性だけではなく、その社会で少数派と呼ばれる人たちや異文化理解を論じるときにも通じる視点である。つまり、フェミニスト心理学とは、心理学研究を行う際に、その社会の主流にある人々の視点とは異なる視点の存在をもつことの重要性を示唆しているのである。こうした異なる視点からの研究の必要性やその方法論などについても、今後考えていかねばならないであろう。

引用文献

- 青野篤子 1994 心理学概論書における母子関係の取り扱い 心理学評論, 36, 288-315
バー, V. 田中和彦 (訳) 1997 『社会的構築主義への招待：言説分析とは何か』 川島書店
Burr, V. 1995 *An introduction to social constructionism*. NY: Routledge.
Crawford, M., & Marecek, J. 1989 Feminist theory, feminist psychology. *Psychology of Women Quarterly*, 13, 477-491.
Denmark, F., Russo, N. F., Frieze, I. H., & Sechzer, J. A. 1988 Guidelines for avoiding sexism in psychological research: A report of the ad hoc committee on nonsexist research. *American Psychologist*, 43, 582-585.
Dovidio, J. F., Ellyson, S. L., Keating, C. E., Heltman, K., & Brown, C. E. 1988 The relation-

- ship of social power to visual displays of dominance between men and women. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54, 233-242.
- イーズリー, B. 市場泰男 (訳) 1986 『魔女狩り対新哲学：自然と女性像の転換をめぐって』平凡社 Easlea, B. 1980 *Witch hunting, magic and the new philosophy: An introduction to debates of the scientific revolution 1450-1750*. Brighton, Sussex: Harvester Press.
- Gergen, M. M. 1988 Building a feminist methodology. *Contemporary Social Psychology*, 13, 47-53. (Riger, S. 1992より)
- ギリガン, C. 岩男寿美子 (監訳) 1986 『もう一つの声：男女の道德観のちがいと女性のアイデンティティ』川島書店 Gilligan, C. 1982 *In a different voice: Psychological theory and women's development*. Ma: Harvard University Press.
- 川浦康至・山下清美・川上善郎 1999 人はなぜウェブ日記を書き続けるのか：コンピュータ・ネットワークにおける自己表現 *社会心理学研究*, 14, 133-143.
- ケラー, E. F. 長野 敬 (訳) 1996 『機械の身体：越境する分子生物学』青土社 Keller, E. F. 1995 *Refiguring life*. Columbia University Press.
- 金 官圭 1999 CMC (computer-mediated communication) における印象形成に関する探索的研究 *社会心理学研究*, 14, 123-132.
- コールバーグ, L. 永野重史 (監訳) 1987 『道德性の形成：認知発達のアプローチ』新曜社 Kohlberg, L. 1969 Stage and sequence: The cognitive-developmental approach to socialization. In D. Goslin (Ed.), *Handbook of socialization theory and research* (pp. 347-480). Il: Rand McNally.
- 小泉智恵 1997 仕事と家庭の多重役割が心理的側面に及ぼす影響：展望 *母子研究*, 18, 42-59.
- マーチャント, C. 団まりな・垂水雄二・樋口祐子 (訳) 1985 『自然の死：科学革命と女・エコロジー』工作舎 Merchant, C. 1980 *The death of nature: Women, ecology and the scientific revolution*. Harper & Row.
- 森永康子 2001 女性と男性はなぜ違うのか：フェミニスト心理学からの考察 *女性学評論*, 15, 23-35.
- 大日向雅美 1988 『母性の研究 その形成と変容の過程：伝統的母性観への反証』川島書店
- Pliner, P., & Chaiken, S. 1990 Eating, social motives, and self-presentation in women and men. *Journal of Experimental Social Psychology*, 26, 240-254.
- Powell, G. N. 1988 *Women and men in management*. Ca: Sage.
- Riger, S. 1992 Epistemological debates, feminist voices: Science, social values, and the

story of women. *American Psychologist*, 47, 730-740.

佐藤達哉 2002『日本における心理学の受容と展開』北大路書房

シービンガー, L. 小川真理子・東川佐枝美・外山浩明 (訳) 2001『ジェンダーは科学を変える!?!』工作舎 Schiebinger, L. 1999 *Has feminism changed science?* Ma: Harvard University Press.

Seavey, C. A., Katz, P. A., & Zalk, S. R. 1975 Baby X: The effect of gender labels on adult responses to infants. *Sex Roles*, 1, 103-109.

シェパード, L. J. 小川真理子・服部範子・小田淳子 (訳) 1997『ヴェールをとる科学』誠信書房 Shepherd, L. J. 1993 *Lifting the veil: The feminine face of science*. Boston, Ma: Shambhala Publication.

Unger, R. K. 1997 The three-sided mirror: Feminist looking at psychologists looking at women. In R. Fuller, P. N. Walsh, & P. McGinley (Eds.) *A century of psychology: Progress, paradigms, and prospects for the new millennium* (pp.16-35). London: Routledge.

付記 本稿は、2002年9月に行われた日本心理学会第66回大会のシンポジウム「フェミニズム心理学をめざして」における発表をもとにしたものである。

Summary

Feminism and Psychology

Yasuko Morinaga

Scientific research is often considered as a purely objective and value-free process in which a neutral scientist investigates and reveals the secrets of nature. This article analyzed sources of distortion in psychological research from a historical perspective: how positivist empiricist criteria for science since the 17th century applied to psychology. Feminist psychologists have argued that traditional scientific inquiry has biases which can enter into at any stage of psychological research process. Human behavior is shaped by sociocultural and political forces. Three types of feminist scholarship within the English-speaking world were also briefly overviewed in this article; feminist positivism, feminist standpoint theory, and feminist postmodernism. Although there are a number of different lenses, feminist psychology is now one of emerging fields even in Japan.